

日本全国『神話伝説の旅』

吉 元 昭 治 著

書評を書くように、と言われて目の前に置かれた本を見て仰天した。「日本全国・神話伝説の旅」と題するこの本は、厚さが5センチ以上あるA5版の大冊だった。体裁にふさわしいデザインの表紙をもち、重量は2kgになろうという重厚さである。これを見て驚かないほうがどうかしているのだが、中をあけてまた驚く。なにしろ、日本建国の時から神話・伝説に係る伝承の細かい記述と、全国に散在するそれらの関連遺跡が、ほぼ漏れなく網羅され、写真入りで掲載されているのだ。

総ページ数は1200ページにも及ぶにもかかわらず、写真は全てカラーである(これで9800円という価格はどうしても信じがたい)。それも、著者が自ら

足を運んで撮影したフィルムカメラによる貴重なものである。

と前置きは「このぐらいにして、内容を読み始めて更に驚く。」

第一部では高天原にはじまる日本の神話を紹介し、神武東征と伊勢

評 安井廣迪

全国の伝承を網羅し詳述 数々の貴重な資料を撮影



神宮、伊邪那岐・伊邪那美伝説、猿田彦伝説、素戔嗚尊伝説、日本武尊伝説などの解説に続いて関連の遺跡(特に神社)をいくつも紹介していく。これらの遺跡は、ある一つの地方にのみ存在しているのではなく、九州、畿内

ときには関東にもおよび、日本人の生活と密接に結びついている様子が明らかにされる。

そのあとには、日本と中国の関係で登場する牟弥呼伝説や、中国の神々の日本での足跡、渡来人の伝説、信仰と各種の伝承など、およそ日本人のルーツと関りのあるものがすべて写真入りで紹介されている。読者は、これを読み進むことによつて、日本各地にある過去の日本人の想いを見るはずである。

著者は、神話・伝承・伝説などは日本人のアイデンティティーに深く関わっているものであるのに、現在の人々がそれらを忘れて省みない現状を憂い「日本人はどこから来て、どこに行こうとしているのかを考えてみたかった」といつ、ともすれば失いかけている祖先からのメッセージをもう一度整理しておくべきだ」といふ本書編纂の動機は、みごとに実を結んだと言つべきであろう。

(勉誠出版・9800円+税)

『藍溪の玉』

山田 遼 著

山田遼先生はレパトリーの広い、スケールの大きな長篇の書ける作家だ。

平成四年には『もうひとつの真珠湾』を刊行され、同六年には第三〇回日本医家芸術クラブ大賞を受賞された。

その後には出版された『審判』（十二年）は、意識下の修羅道を描いたものであり、『五十五年の夢』（十八年）は異説の歴史文学で、今回は伝奇小説である。

唐は玄宗皇帝の時、長安南東の藍溪と呼ばれる溪谷に、碧玉を探す盧昂という男がいた。息子の盧哲元は、徴兵されて生死不明。盧昂は息子の嫁・梁惠麗と孫の阿賢を連れて長安に行く。

長安で酒場を始めた惠麗は、李林甫宰相の息子、李陽修に見初められるが、盧昂は宰相暗殺の嫌疑をかけられ出奔。惠

麗は阿賢を護るため李陽修の好意を受けて、技芸に励む。

惠麗の学ぶ技芸の中に通力がある。舅の友人・徐王建からも愛められ、その習得に励み遊魂した惠麗が着いたのは、

魔界とも思われる地下宮殿

美女の数奇な運命と純愛
著者畢生の伝奇歴史小説



評 天瀬裕康

だった。通力の師・博羅道人は幾多の試練を課すが李陽修に贈られた首飾りの中央に光るのはあの藍溪の碧玉だった。

そのうちに惠麗母子は、楊貴妃の一族により毒を盛られる。その背後には、斎霊大師という魔道士がいた。斎霊に對抗

できるのは玄洞大王のみと聞いた惠麗は、藍溪の玉を握って玄洞の許へ！だが、敵国の捕虜になっていた夫・哲元は敦煌で死ぬ。李陽修は惠麗に揚州への移住を奨めるが、徐王建も消息を絶つ。

もはや斎霊大師を抹殺し、楊一族を倒すしかない。玄洞は碧玉に祈念し、玉は無限の力を宿す。かくして決戦の時が来た。対面すると、斎霊大師はセイレーヌという金髪碧眼の女王だった。激戦の末、惠麗が勝つ。

その五年後、安祿山の乱が起こるが、揚州では平凡ながら惠麗が李陽修と仲睦まじく暮らし、阿賢は官界へ入るのは止め、詩作に励むのだった。

さて、この伝奇小説の最終章には、日本的な無常観もあるようだ。直木賞に値する作品だが、まずは医家芸術文学賞のようなものを贈賞できぬものか……日本医家芸術クラブの活性化にも繋がるように想えるのである。

（幻冬社・税別1600円）

その

半場 久也



(カットも筆者)

《新世界》から発信されたドヴォル
ジャークの手紙と当時のアメリカ

「ク会社アイオワ州アメリカ合衆国
『ジムロック様！
私は四月月の休暇を、ここスビルヴ

フリッツ・ジムロック宛て》(原文ドイツ語) 訳注「ベルリンの楽譜出版社社長」スビ
リヴィル、一八九三年
七月二日 ウィンネシ

イルです。ここはニューヨークから千三百マイル離れたアイオワ州のボヘミア地区です。そこで私は家族全員と元気でおりますし、あなたからの手紙も受け取りました。ヴォルフさんからの手紙は、あなたが私に出したものと同様、アメリカ中を回って、大分遅れて手にしました。それから一八九三年六月六日ベルリン発の第二回目の手紙は、このスビルヴィルで私に出会ったのです。

ところで私は幸いなことに、益々調子よく作曲していますし、かなり自由にしています。ここでは千五百ドル(或いは六万マルク)のサラリーをもらっています。……そして余暇を作曲に費やす身分です。もしあなたが二年前、プラーハであなたの通信のことを思い出していただければ、何故私が自分の仕事の公開に迷っているか分かってもらえるでしょう。差し当たり新しく出来た、かなりの量の作品があり、所有しているものをお知らせします。

オーケストラのための三つの作曲(新作) ヴァイオリン、チェロ、ピアノのためのトリオ(ドウムキー)

チェロのためのロンド(新曲)

亦短調交響曲(新作)

弦楽四重奏曲へ長調(新作)

その他ヴァイオリン二挺の弦楽五重奏曲を作曲中です。それから《ボヘミアの森》からチェロとピアノのために《安らぎ》を編曲しました。これはチェリストにとつては受けるでしょう。これら全ての曲は(未完成の五重奏曲は別として)、もしお互いに報酬のことで折り合いがつけばあなたが所有することになります。値段を書きます。

序曲(一、二、産)には 一千マルク

《ドウムキー》 一千マルク

亦短調交響曲 一千マルク

ロンド(チェロ独奏) 五百マルク

へ長調弦楽四重奏曲 五百マルク

《安らぎ》チェロ独奏 五百マルク

合計七千五百マルク

(タイトルは内側の、ドイツ語とポヘミア語にしてください!) 私はあなたがいつも支払ってくださる以上には求めません。私は九月十五日に学校の授業が始まるニューヨークへ向かいます。ですから、そこであなたからの返事を待っています。けれども距離がとも遠いので(手紙では十六日必要です)、作品が十月か十一月には出来あがっているため、物事が無限に延期されることを恐れるのです。けれど私と同様に、先刻ご承知と思いますが、私はニューヨークの初演で序曲をやりました(本短調の交響曲は未だですが)。そしてそれが、私の最も良いオーケストラ作品であると思っています。序曲のオーケストラ用のパート譜はニューヨークの音楽院にあり、そこから九月にはあなたのもとへ送ることができるとしよう。

他の全部のスコアとパート譜はここにありません。新しい本短調交響曲のパート譜はありません。これをあなたはベルリンでコピーさせねばならないでしょう。

出版社と楽譜の価格交渉

《ドウムキー》は最初に印刷することが出来ます。ロンドモチェロ用の曲《安らぎ》もです。結果的にはあなたが好きなようになされればよいのです。三曲の序曲の四手のピアノ版は直ちに送れますし、そのもの自体は十月までに用意しましょう。

《ドウムキー》の四手用の編曲は作りませんでした。そうすることは大変難しいと思います。そのことを何度も考えましたにはためらっているのです。私はそれがほとんど不可能に思えます。そのことをする気はありません。他の誰かがやってくれるでしょう。私は進んでやる気はありません。あまり時間が無いのです。恐らくニューヨークでも私の生徒の誰かにそれをやらせてみましょう。今ここに六人の子供全部がいて満足しています。来年六月にヨーロッパへ行こうかと思っています。私の家内から良い挨拶を送ります。

コメント ここではジムロック出版社の社長へ宛てて現況を書いている。最近作った曲の紹介と、具体的な売値を提示している。ここで少し気になるのは、ピアノ・トリオ《ドウムキー》の値段が、あの有名な弦楽四重奏曲《アメリカ》の四倍で、《新世界》本短調交響曲と同じだと言っていることである。《ドウムキー》は一八九〇年十一月から九十一年二月にかけて作られているので、当然渡米前の作品である。この曲はウクライナ起源の民族音楽である《ドウムカ》を大いに駆使し、成功した作品であり、彼の代表作であることは間違いない。多分、印刷される前に試奏され評判が大変よかったのである。彼の自信作であったことは間違いない。それに比して《アメリカ》は出来たばかりで評判は未だ分らないが、今考えてみると、現在は《アメリカ》の方が演奏会のプログラムに載ることが多いと思われる。

さてここで、手紙の宛て先であるジム

ロックとの関係について少し触れなければならぬ。話は一八七七年十二月に遡るが、すでに七四年から毎年オーストリア国家奨学金制度に応募し採用されていた彼の才能を見込んだ音楽評論家ハンスリックから、ブラームスに送られた楽譜が《モラヴィア二十唱曲集》で、これに目を通したブラームスは、その曲の素晴らしさに驚嘆し、早速ドヴォルジャークに手紙を出して彼を賞賛し、同時にベルリンの出版社ジムロックへも推薦状を書き、この作曲家に注意することを促した。それからジムロックは本気になって彼の作品を出版することになる。

しかし大曲は売れにくい関係か、ドヴォルジャークには歌曲集とか舞踊曲と言った商品を求めていた。そのことに作曲家は常々愚痴をこぼしている。一方、彼はブラームスとは親交を結び、お互いにお互いの家を訪問しあった。なお、文中「……もしあなたが二年前、プラーハでのあなたの通信のことを思い出していた

だければ」とあるジムロックからの手紙は、この書簡集に収録されていないので不明だが、その手紙に対するドヴォルジャークの返事が出ているので引用する。

それはプラーハから一八九〇年十月十一日付のものである。いきなり冒頭から「あなたも素晴らしい考えをお持ちですね」と、大変皮肉を込めた言い方で始まっている。続いて「私が作曲し、あなたに提供せよとあり、その結果あなたは簡単に断わりになる！ あなたは私に去年コーラスとオルガンのためのミサ曲として今私の新しい交響曲を拒否なさった後、私はあなたのきつい要求のせいでああなたが私の大曲を引き受けないことに甘んじなければなりません。しかし私は愚弄されませんぞ……（中略）……私はそれ故、これから私の作品に対して私の欲する金額を要求するでしょう。あなたは私にそれを支払い、私はあなたにそれを渡すと言つことです。

最後に、私が十二年前あなたかも経験不

足からというが、馬鹿だったからか、署名をしてしまった契約書を私のためにコピーしてください。あなたが法的に追求するならば、私はそれを持って権威のある仲間達に回し読みしてもらい、審議することが出来ます。あなたはいつも言っていますね、私の作品は売れないと。では何故それらを欲しがって私に寄越せと命令するのですか。もしあなたが私のものを拒否するのなら、私が自分のために他の出版社で、いくら稼ぐことを何故許さないのですか？ これは誰にも理解しないことだ！（後略）」

この手紙を読むと、彼は出版者、ジムロックに大分振り回されていたらしい。ジムロックは売れ行きの良かった《スラフ舞曲集》に味をしめて、彼に歌曲や舞曲の様な、誰でも飛びつくものをしつこく要求したのである。それに反して作曲家はミサ曲やシンフォニーといった大規模な曲を出版して欲しかったのだ。しかしその後、和解したよつに見える。